



香りが体にもたら  
すもの

1 1月の短編 4

m. suzuki

## 香りが体にもたらずもの

---

今朝方まで降っていた雨が滴のまま、まだ木の枝に残っている。行儀よく並んだたくさんの滴は、早朝の光を受けてきらきらと、これから始まる一日が晴天であることを知らせるように輝いている。

そう、今は朝だ。

白っぽい光に瞬きをしながら、わたしは心の中で繰り返した。

間違いなく、朝だ。

「どうしても……だめなのか？」

もう何度目か知れない、こちらをうかがうような声がまた聞こえた。

「……」

わたしは何も答えずに、窓の外を見続けた。

昇って来たての太陽が、街路樹が並んだずっと先に、ようやくその姿を現わし始めている。

「だめか……やっぱり」

声に、ため息が混じる。

こんな口調は、あまり聞かない。元来が、自信家過ぎるほどに自信家な人なのだ。そんな人間がこうして人前でため息をつくのだから、心にさす影は、よほど濃いのだろう。でも、それに惑わされてはいけない。

もっと言えば、それに騙されてはいけない。

「でも、諦めきれない」

そしてまた、何度目か知れない同じ台詞が続いた。

下手くそな脚本家書いた、自己中心的なドラマのようだ。どれほど深刻な場面であろうとも、長くそこに留まりすぎれば見ている側は飽きる。でも書いている本人は気付かずに、挙句、書きながら涙ぐんでいたりする。

カップの中のコーヒーは、半分残ったまますっかり冷えてしまっていた。

朝食も食わずに二杯もコーヒーを飲んだせいで、胃の奥がきりきりと痛んでいる。

つまり、朝なのだ。

わたしは心底うんざりする思いで、心の中でもう一度そう繰り返した。

「そうだよ、何で俺が諦めなきゃいけないんだ？」

無限ループからようやく抜け出したかと思うと、今度はこの傲慢な台詞だ。

「……」

呆れて、ついその顔に視線を向けていた。

「俺が諦めなきゃいけない理由は、どこにもない」

毒などかけらもない、無邪気で自信に満ちた表情が、悪びれた様子もなくそう宣言する。

「どうして……」

言いかけた言葉がそのまま、口の中で立ち消えた。

また無限ループを呼んでしまいそうな言葉だということに、口にするより先に気付いたからだ

。

「諦めないぞ、俺は」

世界一無責任で、世界一自信過剰な男が言う。

「……好きにして。でもわたしは、もう関わらない」

それ以外、どう言えというのか。

これ以上どう言えば、この世界一自己中心的な男を納得させられるというのか。

「何で？」

「……」

言葉よりも先に、ため息が口をついた。

「大丈夫か？」

「心配するぐらいなら、まず理解して」

出来の悪い中学生に日本語を教えるほうが、まだましに違いない。

「理解なら……」

「してない」

わたしはすぐにその言葉を遮った。

「絶対にしてない」

思いのほか声が大きくなってしまったが、二十四時間営業のファミリー・レストランはそろそろ朝食をとる客で混み始めていて、さっきまでのように、店内に響き渡るようなことはもうなかった。

「言いきるか？」

「必要なら何度でも」

いかにこの男が無責任で、いかに自己中心的で、いかに人の気持ちを察しない人間かということに関してなら、わたしは一時間でも二時間でもしゃべり続けることが出来る。

ただし、早朝でなければの話のだが。

「……なあ」

「何度言われても同じ」

「そうじゃなくて」

「何？」

「腹、減らないか？」

どこまでも悠長な男は言う、胃の辺りをさすって見せた。

確かに店内には和食洋食入り混じった匂いが漂っていたが、それで空腹を覚えるということつまり、この男にとって今ここで交わされている会話は、その程度のものということなのだろう

。

「腹減るとさ、神経がとんがるだろ」

「わたしがとんがってるとでも？」

「臨戦態勢だ」

「は？」

「臨戦態勢になると、何も食わなくなる。命がかかってるからな」

話しがずれるのは年中のことで、その独特な思考回路にあっいまさら振り回されるほど、付き合いが浅いわけでもない。でも今日は、そんな自分の適応能力にすら苛立ちを感じる。

「ゴリラもシマウマも、わたしの日常生活には何の関係もない」

「人間だ」

「え？」

「周り中がぴりぴりしてると、こっちも、腹が減ってることにすら気付かない。食うことよりも、生き残ることが先だ」

水の入ったグラスをつかむ左手に、つられるように目がいった。袖口からのぞく腕に、少し大きめの絆創膏が見える。

どこに行っていたの。

つい口をつきかけた言葉を無理にのみ込むと、心の奥が鈍く痛んだ。

ほら。

もう関わりたくない。

それが正解。

こんなことを、これ以上繰り返してはいけない。

「何か食べればいいでしょ。たらふく食べて路上で眠り込んだって、この時間なら間違いなく、命に関わるようなことにはならない。ここはそういう国」

「ああ、そうだな」

何がおかしいのか、無責任男はそこでくすりと笑った。

「とにかく……」

目の前の男が昨日まで置かれていただろう状況をつい想像しかけて、そんな自分を何とか振り切る。

「とにかく、わたしはもう無理だから」

「何で？」

その屈託のない聞き返し方が、また癪に障った。

「何で？ 何でって言った、今？ ねえ、いったい何聞いてたの？ 結局こっちの言うことなんか、何も聞いてないんじゃない。向こうで見てきたことでも考えながら、わたしの話しなんか適当に聞き流してたんでしょ。いつもそう。いつも、いつも、わたしが何も知らないと思  
って……」

「いつ俺が……」

「うるさい」

「おい……」

「黙れ」

従順に、無責任男が口をつぐんだ。

「第二火曜と第四火曜が定休日、今日はその第二火曜」

一度深呼吸をしてから、声を落ち着かせた。

「月に二度しかないお休みの、そのうちの一曰」

休みが極端に少ない。でも、苦しめたことはなかった。一人で家にいるほうがずっと辛い。それがわかっているから、一日中立ちっぱなしでも、辞めたいと思ったことなど一度もなかった。

でもそれも、もう限界だと思った。

仕事が、ではない。

仕事で紛らわせることが。

今回という今回は、つくづくそう思った。もうこんなことは終わりにしよう。それが、わたしが出した結論だ。

「休みの日はこんな時間から、起きたりしない」

インターホンが鳴ったとき、どこかのビーチで手足を伸ばして日光浴をする夢を見ていた。そろそろ寒さも厳しくなろうかというこの時期、夢とは言え、至福のひと時だった。

それをこの無責任男が鳴らしたインターホンが、容赦のかけらもなく断ち切ったのだ。

枕もとの時計は五時三十分を指していた。もちろん、午前。

「飛行機が遅れたんだ」

「わたしのせいじゃない」

「そんなこと言った憶えは……」

「どこかの航空会社の飛行機が定刻より六時間も遅れたからって、どうしてわたしが、月に二度しかない貴重な休みに、まだ暗いうちからたたき起こされなきゃいけないの？ いつもなら、少なくともあと五時間は寝てたのに」

「それなら謝って……」

「そんな簡単なことじゃない」

「でも俺の家でもあるわけだし……」

「なら、わたしは出て行く」

「おい、ちょっと……」

「言ったでしょ、もう限界だって」

「だから何……」

「半年」

そう、きっかり半年だ。

わたしは目の前の男を見据えた。

「ある日突然姿を消して、半年何の音沙汰もなく、いきなり夜も明けきらないうちに帰って来て、こともあろうに、俺の家でもあるですって？」

出会ったのはちょうど七年前で、わたしが高校三年生のときだった。

勉強が大嫌いで、何しに高校に通っているのかわからないような成績しかとることが出来ず、上の学校に行く気など毛頭起こらなかった。かと言って、したいことがあるわけでもなく、夏休みも終わり二学期だというのに、先の展望などまったく開けて来ない。教師も呆れ顔で、そんないい加減なやつにかまっている時間はないと、口にこそ出さないものの、態度には十分表われていた。ついこの間まで一緒になって遊んでいた子たちが次々と進路の話題を口に始めて、そん

な雰囲気になんかついていけないわたしは、学校から離れた駅で電車を降りて、よく街をぶらついてた。

何がしたいのかわからないと言う以前に、何が出来るのかが、そもそもそれがわからなかった。人より出来ないことはたくさんあったが、人より出来ることは何もなかった。自分一人がそうだと思うことは一度もなかったが、そんな人間が上手く収まる場所がどこにあるのか、教えてくれる人は誰もいなかった。

時間をかけていいんだよ。

今思えば、あの時欲しかったのは、そんな言葉だったのだろう。でもそんな悠長さは、少なくともわたしの周りには一切なかった。

その日も、一度も降りたことのない駅で降りて、行く先も決めずにただ歩き回っていた。時間が無為に流れていくことが、むしろ心地よかったように思う。焦ってなんかやるもんか。そんな反抗心の、裏返しでもあったのかもしれない。

書店の店先に張られたポスターに、目が留まった。

何だかわからない力につかまれたようで、しばらく動けずにいた。

左目と左耳だけ、顔の四分の一しか写っていない、象の写真。

何故それほどまでに惹きつけられたのか、日本語の成績すら怪しかったわたしに説明など望むべくもないが、とにかく、ずいぶん長い時間、まるで呆けたようにポスターの前から離れることが出来なかった。

「写真が、好きなの？」

声に振り向くと、書店の店員らしき女性が立っていた。三十歳ぐらいの、きれいな人だった。

「いえ……そういうわけじゃ……」

とっさのことで、言葉に詰まった。

「この先にある小さなギャラリーだけど、よかったら見て行ってあげて」

「え？」

写真展のポスターだということに、そのとき初めて気が付いた。

「その人ね、ここでアルバイトしてた人なの。ようやく芽が出て、写真家の卵になったんで、みんなでお祝いにね、個展をプレゼントしようってことになって……個展って言うのはちょっと大げさか……でも、うちと、そこの花屋さん、それと向こうの靴屋さん、他にも何軒か商店街の人で相談して、ようやく開催にこぎつけたのよ。あなたみたいに熱心なお客様なら、きっと大歓迎してくれると思うわ」

芽が出て卵なのかとくだらないことを考えつつ、言われるまま立ち寄った小さなギャラリーは、お世辞にも盛況とは言いがたい状態だった。平日の昼間というせいもあったのだろうが、お客はわたしの他に、大学生らしきカップルが一組いるだけだった。

そして、部屋の隅にある椅子に腰掛けたまま居眠りをしていたのが、真っ黒に日焼けした「写真家の卵」だった。

展示されていた写真は動物が多かったが、どれも、妙な切り口のものばかりだった。「四分の一の顔の象」などはまだ序の口で、歯を剥いた口だけのシマウマ（シマが写っていないのにどう



してシマウマだとわかったのか、いまだによくわからない) や、両手を組んで仰向けに寝ているゴリラの腹(大きな出べそがめずらしかつたらしい) など、わざわざアフリカで行って何でこんなものと思うような、そんな写真ばかりだった。

「熱心に見てくれたお礼に、ハンバーガーでも食うか？」

「え？」

目を覚ました「写真家の卵」が、眠たげな目をして横に立っていた。腕時計に目をやると、いつの間にか二時間以上たっていた。

それから、一週間の期間中毎日通った。さすがに毎日学校をサボるわけにはいかなかったので、しぶしぶ登校した日は、放課後に寄り道をした。

話しをすればするほど、「写真家の卵」はいろいろなことをよく知っていた。学校で習うようなことではなかったが、自分は世の中の仕組みを何も知らないのだと、つくづく痛感させられた。今のまま八年生きて同い年になっても、絶対同じにはなれないだろうと思った。

最終日、まだぜんぜん整理していないけれどと言って、箱に入ったままの写真を見せてくれた。子どもがにっと笑った口が三つ、横に並んだ写真に目が留まった。とある難民キャンプで撮った写真なのだと聞かされて、不覚にも涙が出た。

「生きていることの幸せっていうやつをさ、撮りたくて」

わたしじゃモデルにならないかと、その言葉に少し落ち込んだ。

とにかくいろんな人間を見てやろうと、同じ商店街にある喫茶店でアルバイトを始めたのは、その冬のことだ。ちゃんと勉強してどこか専門学校にでもという外野の声は、片っ端から全部無視した。「写真家の卵」にはとても及ばないだろうけれど、少しでも追いつきたいと、そればかりを考えていた。

結局アルバイトが高じて、卒業後はその喫茶店に就職してしまった。一通ばかりの道に囲まれて車で来るには不便な場所だったが、比較的駅に近いせいか、客足はほどほどだった。忙しい時間帯は座る暇もないし、少ない人間で切り盛りしているため休みも少なかったが、それでも、辛いと思ったことはほとんどなかった。何より、学校に通っているときよりもずっと、自分の形が見える気がした。

いろいろな人がいた。楽しそうな人、悲しそうな人、怒っている人、泣いている人……時には理不尽な言いがかりをつけられることもあったが、どんな人に対しても、同じようにきちんと接しようとずっと心がけた。

商店街にある花屋の主人がよくコーヒーを飲みに来て、花の名前をずいぶん教えてもらった。靴屋の奥さんからは、靴の正しい選び方を教えてもらった。教師の話しは一個も憶えられなかったが、働き始めてから教えてもらったことは、不思議と頭に残った。

ときどき会っていた「写真家の卵」とは、二年が過ぎたころ恋人どうしになった。写真の仕事も少し増えて、卵からようやく雛になったかなというころ、相談して、一緒に暮らし始めた。

写真の切り口は相変わらずで、そこが好き嫌いの分かれるところではあったが、初めて出版した写真集の売れ行きはそこそこだった。

書店の店員さんが前の恋人だったと知ったのは、一緒に暮らし始めて間もなくのときだった。

本店に異動になったとかでも商店街にはいなかったが、きれいな人だったという印象だけは強く、いつまでたっても子どもっぽい自分と比べて、少々落ち着かない気分だった。何が駄目だったのか気になったが、心の狭さを露呈しているようで、結局聞くことは出来なかった。

突然「写真家の雛」が姿を消したのは、ちょうどそんなときだった。仕事から戻ると姿がなく、翌日になっても戻らなかった。愛想を尽かされたのかもしれない、元の彼女のところに戻ったのかもしれない、そんなことを考えていると涙が出てきたが、当の「雛」は一週間後、何事もなかったような顔で戻って来た。

「撮影に夢中で」

悪びれたところなどかけらもなく、一週間音信普通だったことなど、まったく意に介していない様子だった。ちょっとそこまでという程度の認識しかないようだったが、行き先をたずねると、口永良部島だった。

それから、同じようなことは続いた。

年に二、三度のペースで突然姿を消し、そしてその期間は、「写真家の雛」が「写真家の成鳥」になるにつれて、どんどんと長くなっていった。

どこかでケガでもしていないか、妙なことに巻き込まれていないか、彼が姿を消すと同時に、そんな心配が毎日のように思い浮かぶ。戻って来れば来たで、またいなくなっているんじゃないか、仕事を終えて戻るとカメラがなくなっているんじゃないか、そんな不安が毎日のように思い浮かぶ。

諦めるしかないのか。

そういう人と一緒にいるのだから。

でも年を追うごとに、迷いが首をもたげるようになった。

わたしはいったい何をしているのだろう。たった一人部屋にいと、そんな不毛な疑問も時折頭をかすめた。

短くてもかまわないから、せめて連絡を。

口にして何度伝えても、撮影に夢中になってしまえば何もかも忘れてしまう人だった。写真を撮ることに集中していると、一日が一時間になってしまうような人だった。

そしてわたしは、彼のことが好きで、彼の撮る写真が好きで、待っていたと思う気持ちをどうしても抑えることが出来ない。いつかは戻って来る。そう思うことで、繰り返し湧き上がってくる不安を何とかやり過ごした。

そろそろ限界が近いかもしれない、そう思い始めたのはいつからか。二ヶ月、三ヶ月と音信不通が続くようになると、さすがに苦痛で胃が痛んだ。

戻って来れば素直に嬉しいが、またいなくなるかと思うと、喜んでばかりもいられない。

これが恋人同士かと真剣に考え始めた頃、彼がまた、カメラと一緒に姿を消した。

一ヶ月だけ待ってみよう。

最初はそう考えた。

でも二ヶ月たっても、彼からの連絡は何もなかった。

三ヶ月が過ぎる頃、限界をという言葉の意味をはっきりと悟った。



書店の彼女と別れたのも、もしかしたら同じようなことが原因だったのかもしれない。あの時すでに三十前後に見えた彼女は、撮影となると何も見えなくなってしまう彼に、わたし以上の不安を感じていたのかもしれない。

いつの間にかわたしも、二十五歳になっていた。

いろいろなことを考えて、迷って、悩んで、泣いて、そして、もう終わりにしようと思った。次に戻って来たらきちんとさよならを言って、それですべて終わりにしよう、そう決めた。

決めてしまうと、少し楽になったような気がした。

そのまま一ヶ月近くたち、多少油断があったのかもしれない。結論は出したという気持ちの余裕が、あらぬ隙を生んでいたのかもしれない。ビーチで寝転ぶなどという夢は、まさしくそんな隙が、もたらしたものだっただけなのかもしれない。

早朝のインターホンに飛び起きたとき、言うつもりだったすべての言葉は頭から消えていた。

「ただいま」

無邪気な笑顔につい、「お帰り」などと答えていた。

そうじゃない！

半分だけ覚醒していた脳細胞の叫びを、聞いたような気がした。

「だめ！」

数秒遅れでようやくそんな言葉が口から出たとき、彼はすでに、靴を脱ぎかけていた。

「入っちゃだめ！」

少々の押し問答ののち、この、二十四時間営業のファミリー・レストランにようやく落ち着いた。

もう終わりにしたい。限界なの。

わたしの言葉に驚いた彼は、どうして、わからない、どうしてもだめなのか……などなど、そのような言葉を何度も繰り返した。

わたしはいったいあなたの何。

そんな言葉を口にする気は、もちろんない。一緒にいたかったから、今日まで一緒にいた。一緒にいたかったから、待ち続けてもいた。そんな自分自身の気持ちを、誰かのせいにしてしまうなどという気は毛頭ない。ただ。

生きていることの幸せってやつを、撮りたい。

いまだにそれが口癖のこの人に、わたしはいったいどう見えているのだろうかと思う。

わたしの中に、幸せは見えるのだろうか。

シマウマやゴリラの中には見える幸せが、わたしの中にもあるのだろうか。

「……ケガ、したの？」

長い沈黙に耐えきれなくなって、わたしは口を開いた。袖口から見えた絆創膏は、薬局で売っているものよりもずっと大きなものだった。

「空爆があったんだ」

「そんなところに……」

紛争地帯に近い場所までいくことはあっても、実際に、戦場に入ることまではなかったはずだ

った。

「違う、ただの畑だ」

「え？」

「確かに国境には近い村だった。でも、正真正銘ただのトウモロコシ畑だったんだ。それが、反政府勢力の隠れ場所だってさ。夜の中に空爆があって、朝になったらただの荒地だ。収穫間近のトウモロコシが全部根こそぎ吹き飛んで、村の連中がみんなして泣くんだ。明日から何を食べればいいって……あんな平和な村の神経を逆撫でして、とんがらせて……余計な揉め事の種を増やすだけだったのが……」

唇をかんで言葉を詰まらせた顔は、あまり見たことのないものだった。

ささやかな幸せを見るのが大好きな写真家は、そんな幸せが壊れていくのを見るのが、何よりも嫌いなのだろう。

どんな場所でも、小さな小さな幸せが一個あれば、人はそれで生きていけるんだ。

ずいぶん前に聞いたそんな言葉が、思い浮かんだ。

「ああ、忘れるとこだった、これ」

言いながら彼は、ポケットの中から何かを取り出して、テーブルの上に置いた。

「あ……」

見覚えのある、青い小さなガラス壺だった。

「そろそろなくなるって言ってただろ。だから、買いに行こうと思ってさ」

中東にある小さな町で、何とかという小難しい名前の木から取れる香水だ。グレープフルーツとザボンを混ぜ合わせたような実が成る木で、葉も枝も、実と同じ香りがする。果肉をはずした後の皮を乾燥させたものや葉から、この香水は抽出するのだという。付き合い始めた頃に初めてプレゼントされ、以来すっかり気に入ってしまい、これでもう四本目だろうか。

喫茶店のウェイトレスという仕事柄、飲食物の味に影響するような香りを身につけるわけにはいかない。でもこの香りなら、よほどきつくつけない限り大丈夫なはずだった。波立った気持ちを落ち着ける効果があるとかで、現地では、室内用のアロマとしても使われているらしい。

つまり、これを買うために出かけていたのだと、この写真家は言っているのだ。

「これを買うのに、半年かかったの？」

隙あらばとこみ上げてくる嬉しさを、何とか押さえつけた。

惑わされるな。どれほど悩んで、どれほど泣いたか。

「それを言われるとなあ……」

案の定、彼は苦笑しながら頭をかいた。

行く先々で目につくものに心を奪われて、わたしのことなどすっかり失念していたのだろう。

「参ったよ、その香り……向こうでかぐたびに思い出して」

「何を？」

判るような気はしたが、あえてたずね返した。

思い出した回数なら、きっと負けない。

「いや、だから……」

答えに窮した写真家は、日に焼けた顔をあらぬ方向へと向けた。

「つまり、きっかけがないと、思い出さないってことね」

待って、待って、そして限界は来たのだ。

香水になど、屈してたまるか。

「……悪かった」

「いいよ、もう」

出した結論は、きっと間違っていない。またきっと、同じことは繰り返される。写真家が写真家である限り、ずっと繰り返される。そしてわたしは、同じ思いを我慢し続けることがもう出来ない。

「写真撮ってるときは、写真のことしか考えてないって知ってるから。だからもう……」

「違う」

思いがけず、強い口調で遮られた。

「違う」

日に焼けた顔が、まっすぐにこっちを向いていた。

「俺はいつも、一緒に撮ってる気にいる。後ろに立って見てるって、そう思ってる」

「……」

それは勝手な思い込みだ。

反論しようとしたが、言葉が出て来なかった。

「最初に会ったとき、個展の最後の日、撮りためた写真から、一枚だけ選んだだろ？」

「……」

小さいけれど大きく笑った口が三つ、横に並んだ写真が思い浮かんだ。

「あんなに乱雑で、ぐちゃぐちゃにただ箱に突っ込んであったのに、それでもあの一枚を選んだだろ？」

今よりずっと素直だったわたしは、写真を見ただけで涙を流したのだ。

「あの時わかったんだ。おんなじ目だって。俺と、おんなじ目を持ってるんだって」

「同じ目？」

「ああ。おかげで、自信がついた。この子がいいって言ってくれる写真を撮っていれば、間違いないって」

この写真家の目の中に、わたしはいつも一緒にいたのか。

わたしはいつも、この写真家と一緒に撮影をしていたのか。

「そんな……勝手なこと……」

まだ抵抗を試みようとする自分が口のほうは支配していたが、頭の中では、何故あの時象の写真に動けなくなったのか、その理由がようやくわかった気がしていた。

この象を目の前にしたら、きっと、わたしにもこう見える。

「ほんとにな」

ずいぶんと反省したようで、写真家はめずらしく素直に頷いた。

「……そうだよ」

ずっと一緒にいたつもりだと彼は言い、ずっと一人だったとわたしは言い、平行線以前のポジションで、どこまで行っても噛み合うはずのない会話をしている。

本当にそうなのか。

どこかから、違う声が聞こえた。

限界とは、何に対する限界か。

電話一つよこさない相手を、待ち続けること。

何を待ち続けるのか。

帰ってくる日を、会える日を。

……。

連絡を。

……。

ちゃんと、憶えていると知らせて。

……。

ちゃんと、まだ思ってるって知らせて。

「……もう」

長いため息が口をついた。

写真を撮っている限り、思ってるってことになるじゃないか。

何でこんなことに気付いてしまったんだろう。

何でこんなことに、気付かさせてくれるんだろう。

「もう、いい」

「でも俺は、どうしても諦めき……」

「帰ろう」

「あ？」

「帰って、一緒にご飯食べて、買い物にでも出かけよう」

「お、おい、それって……」

「聞こえなかった？」

「いや、でも、さっきまでのあの勢いはいったい……」

「不満？」

「い、いや、一切ない。そんなものはこれっぽっちもない」

写真家は慌てたように、首を大きく横に振った。

「じゃ、行こう」

香水の小さな壺を手に取り、わたしは席を立った。

たぶん、同じことはまた繰り返される。彼は突然いなくなり、そして、何ヶ月も音沙汰がなくなる。

「写真、見せて」

「ああ」

歩道で振り返ると彼は、朝日にまぶしそうに顔をしかめていた。

また同じことが繰り返されても、わたしはたぶん……。

「ああ、おなか空いた」

見上げると、青空だった。